

読み手の「いのち」と作品の「いのち」が、葛藤の〈向こう〉で

〈魂が響き合う〉ことを夢見て

— 田中寒『いのちと文学 読みのマナーキーを超えて』を問い直し続けて —

I dream that the “soul” of the reader and the “soul” of the literary work will resonate on the other side of the conflict

— Continuing to revise the question of Minoru Tanaka’s 『Soul and Literature: Beyond the Anarchy of Reading』 —

近代小説の〈実体験とフィクション〉／深層批評とは何か／志賀直哉『城の崎にて』の〈こぼれ〉の仕組みの秘密

中村 龍一

I 死なねばならぬ「いのち」の文学

— 「文学研究」と「文学の授業」「を」架ける会」とは何者だ —

1 最前線の町医者願

私は一〇年前拙著でこんなことを書いた。

私は二十六歳から公立中学校の国語教師として教員生活を三十三年間過ごした。町医者が日々を患者と格闘しながらも研究を怠らないと同様、国語教師は、日本語の町医者として実践研究を手放してはならないと考えてきた。したがって、私の勉強は臨床研究であり、実践理論研究である。大学での研究が「最先端」ならば、私が見据えているのは「最前線」である。このことは私のささやかなプライドである。だが、「最先端」の理論研究は研究者に任せておけばいいという考えにも同意できない。町医者は医療の「最先端」を常に注目していなくてはならない。

教師は一職業である。しかし、偶然担任したに過ぎない子どもたちであっても生活を共にすることで愛着が湧く。字が読めなければ読めるようにしてあげたい。文章が綴れなければ上手に書けたと褒めてあげたいと思ひ、指導の手だてを模索し、

自らも学ぶ。国語教育のあらゆる理論研究は、この教師の一人ひとりの子どもに対する願いに始まらなくてはならない。私が文科省の学力調査に疑念を表し、言語技術や言語活動に主義を付けて批判する不遜は、その必要に一定の理解はできて、教育は教師と子どもの信頼関係で成立するという確信があるからである。平均点やマニュアルは教師の側の必要である。子どもは工場生産できない。どんなに手が掛かって、教師は学校や学級集団のなかで一人ひとりの子どもを診る町医者なのだ。〔中村龍一』「語り論」がひろく文学の授業』(2012 ちくま書房) (傍線筆者)〕

2 田中美「看護学の根本精神」 ― 〈死〉なねばならぬ〈いのち〉の価値を〈問う〉 ―

介護者及び看護者は永遠に患者の立場に立つことはできない。山梨看護専門学校での講演の際、看護専門学校の先生方にそう話したとき、そんなことを考えれば看護は成り立たない。患者の立場に立っているから看護ができるのだとベテランの看護婦さんから反発を受けたことがある。もちろん〈ことば〉だけならその通りだと思う。だが、そこには落とし穴が待っている。肝心なことは、そうした一体性を幻想として峻拒していく態度であり、それこそ患者の立場に向かう道であると私は思う。患者にとつて好いことだと判断しているのはしばしば医療者や介護者、看護者がそう思い込んでいるに過ぎず、実際は看護人と病人との間にずれが生じて、それぞれのなかに小さな、あるいは恐ろしい葛藤が隠れている。その葛藤が生きる喜びを引き出すような葛藤に転化されなければならない。それは一方で無限に相手を受け入れることが自分の生きる喜びと力になるような関係、委ね・委ねられる関係であり、ここに向かうことの困難さが看護者における患者の身体に対応するときの困難さである。看護者と患者の葛藤を超えていく力を探り出していく道が看護学の根本精神であれば、文学研究の場合、読み手と〈本文〉の葛藤を超えていくのが、「新しい作品論」への試みである。

(中略)

教師は生徒の優れた働き手であることこそ肝要である。優れた読み手(教師)とは生徒それぞれの声がいかに深く、鋭く受け止められるかにかかっている。生徒に対して特権的で、管理的な立場に立たされている教師にとって、〈読み〉とは、生徒と相対的に異なる別の解釈をする行為でしかない。生徒達は海、寄せ返すごとくに異なる波を受け止める至難は言うまでもないが、教師を含めて抑圧された生徒達の多種多様な〈読み〉を吸収し、大空に跳ね返す〈教材の力〉その〈読み〉の深さを捉えていくことこそ、可能性に満ち満ちているのである。

(田中美』いのちと文学 読みのアナーキーを超えて』(1997 右文書院) (傍線 太字 筆者)

私の教師生活は千葉県の肢体不自由の養護学校中学部重複学級の担任から始まった。教師はこの子どもたちが現実社会を生き抜く力を育む「一職業」と考えていた。そして一方で己の生きる指針は内村鑑三に問うてきた。しかし、田中実の「〈第三項〉論」は、「一人の教師」と「一人の人間」として生きる葛藤・矛盾が〈向こう〉で一つの〈いのちの問い〉となることを私に発見させてくれた。それは田中が患者と看護師の関係の深奥に隠れている〈死〉の問題を私から引き出してくれたからである。①以来私は「一教師」の葛藤を抱え込んで「一人の人間」を生きたいと願うようになった。今私は国語教育の文学教材の〈読み〉の目標を生活言語の習得を超えた〈生きることの意味・いのちの価値〉に置いている。

文学研究者田中実は「〈死〉なねばならぬ〈いのち〉」の価値を、私に〈問うた〉のである。〈死〉を抱え込んだ世界観認識（「死生観」）があることを、私は得心できるようになった。

さらに田中は、読み手と〈本文〉の葛藤を超えていくのが「新しい作品論」への試みであると、文学作品の〈読み〉を田中自身の〈いのち〉の〈問い〉に鋭く引き寄せた。読むことは己を読むことである。

②つまり、読み手である中村の既成の観念と中村が現象させた〈本文〉との葛藤を超えていこうとすることが文学作品・文学教材を読むこととなる。そこでは文学研究も文学の授業も全く違いはないイコールなのである。最先端の〈いのちの文学研究〉が最前線の〈いのちの文学の授業〉の相関関係で〈生きることの意味・いのちの価値〉を掘り起こそうとしているのが「架ける会」である。いまだ「文学研究」と「文学の授業」を二元論で考えるのが国語教育の常識である中でこの議論を深めたい。

「教師を含めて抑圧された生徒達の多種多様な〈読み〉を吸収し、大空に跳ね返す〈教材の力〉、その〈読み〉の深さを捉えていくことこそ、可能性に満ち満ちている」と田中実は記している。このことは私の授業実践の〈願い〉となった。③「教材の力」、〈作品の意志〉1を〈読み手〉の言葉で「深く捉えていく」ことを具体的作品で考えてみたい。〈作品の意志〉については、これまで三年間、作品それぞれで「ああか、こうか」と考え続けてきたが、私にとっては簡単なことではなかった。何故なのか。

II 宮沢賢治『猫の事務所』…ある小さな官衙に関する幻想…』を読む

— 「語りの放棄」を抱え込んで、〈向こう〉 —

1 田近洵一の「文学の読みにおける意味創造と主観性の克服の難問」の提起

田近洵一は①国語教育研究者として最後の単著であるとする二冊を刊行した。2

その一冊が『国語教育革新の視点―「学ぶ」を通して、人間として生きる―』（2022）である。

二〇二〇年の時点で生涯最後とする師の書に、私は心からの敬意と「分かっていただけなかった」という思いがなймаぜになつた衝撃があつた。少々迂回になるが、宮沢賢治『猫の事務所…ある小さな官衙に関する幻想…』を読む前に、田近洵一の（「6文学の〈読み〉の授業―初読から再読へ」）の「読みのシステム」に関する論述、二箇所を引用し検討してみたい。

A…〈読み〉は、一人ひとりの読者のものであり、多様である。しかし、多様性というところで〈読み〉を読者の主観の枠組みの内に留めてはならない。主観の枠を超えるには、作品のことばとのかかわりを深めていくしかないのである。文学を読むとは、ことばを通して人間を追及するということである。ことばの上に人間を読む、そして、人間理解を深め、人間への思いを広げる、その時〈読み〉は、読者に新しい他者との出会いをもたらすのである。では、そのようなことばとのかかわりは、いかにあるべきか。

結局は、文学のことばの仕組みをどうとらえるか、どのような活動を通して文学のかかわりを深めるか、つまり、文学の〈読み〉の教育のあり方が、実践の問題として問われているのである。（P53～54）

B 国語教育界では、ほとんど実践・研究の視野にはいつてない問題かもしれないが、平成にはいつてからの文学教育をめぐる論議は2000年代の半ば頃から田中実・須貝千里らによって厳しく批判されるようになった。田中実は、1996（平成8）年の『小説の力／新しい作品論のために』に続いて、1997年（平成9）年『読みのアナキーを超えて』を著し、関口の読者論に立つ読みの理論を「エセ読みのアナキー」といつて批判し、その後一貫して、読みの行為において、読者は如何にして自己の主観を倒壊していくことができるかを追究してきた。すなわち、読みは、読者が自分のコンテキストの中で、言語的資料として存在する言語テキスト（＝元の文章）に意味を与えていくことによつて成立するのだが、どうしたらその読みの行為において、自己の主観の枠組みを超えて、自分の読みを創っていくことができるのかを問うてきたのである。言語行為の問題として言うなら、表現も理解もともに言語主体にとっては意味生成あるいは意味創造の行為として成立するのだが、では、その言語行為において、どうしたら主観の枠組みを超えて、自己の意味世界を創っていくことができるのかということである。（中略）

目標論の観点から見ると、異質性の受容及び自己対象化の能力、さらには自己の言語に対するメタ言語的な意識・能力などを教育内容とした目標の設定が問題になるであろう。（同 P233～234 傍線・太字 筆者）

田近洵一は「読みは、読者が自分のコンテクストの中で、② 言語的資材として存在する言語テキスト（＝元の文章）に意味を与えていくことよって成立する」と考えており、田中実、須貝千里の「〈読み〉の原理」論からの提案を正面から引き受けるとしながらも、その「どうしたらその読みの行為において、自己の主観の枠組みを超えて、自分の読みを創っていくことができるのか」は克服できなかった。つまり、プロット（「できごと」の語り）の読みから逃れられなかったのである。田中実は③ 発話主体のことばの主観性から未来永劫逃れられないと考えており、その主観の枠組みをどう超えるかが問題であった。田近と田中の「言語観」は真逆だったのである。

2 日本語文化としての「言語的資材」と、読み手の現象としての「原文の〈影〉」

ここで『文学の教材研究 ― 〈読み〉のおもしろさを掘り起こす』（2014 ことばと教育の会編）での「対談 文学の〈読み〉の理論と教育 ― その接点を求めて」（田近洵一×田中実／中村龍一（司会））の二人の「〈読み〉のメカニズム」、 「言語観」の違いが際立った発言を紹介する。

田中：肝心なのは「読む行為」の奪回です。まず、「容認可能な複数性」としての実体を斥け、「読むこと」は客体そのものに還元できない。文字から形を伴う概念を取ると永劫の物質の散乱、カオスとしての「還元可能な複数性」、という読みのメカニズム、そのブラックボックスを見つめなくてはなりません。〈言語以前〉、捉えている極点の〈向こう〉から客体そのものの〈影〉でしかないものが現れている、人に見えるもの、知覚できるものは〈向こう〉からの〈影〉が現れたにすぎないのです。（p287下）

田近：僕の場合は、立ち上がる本文というのは恣意的である。本文2、本文3、本文4とできてくる本文の根拠は「語と連鎖」の文章にどのような文脈を与えるかという文脈化の働きの中にある。読者の文脈化の働きが重要である。文脈化の働きを問い返すとともに、そこに成立した本文の意味を問うていく―それが読みの教育の問題だ、と考えています。（p297下）

この対談のキーワードは「容認可能な複数性」と「還元可能な複数性」である。取り上げられた作品は 小学校教材の宮沢賢治「やまなし」と安房直子「きつねの窓」であった。

田近洵一の〈読み〉の根拠となる「言語的資材」の内実は、日本語の文法（とりわけ助詞・助動詞）であった。読者の主観であるコンテクストが戻る場合は主に助詞・助動詞の枠組みのシステムだったのである。しかし、その①「言語的資材に意味を与える」は

田近の意に反して、まさに日本語の言語文化を実体化することになってしまったのではないか。読み手の数だけ解釈がある「容認可能な複数性」、それを超えることはできなかった。

一方、田中実は一に見えるもの、知覚できるものは〈向こう〉からの客体そのものの〈影〉が現れたにすぎないのです」と述べている。「言葉」が指し示す絶対である〈原文〉そのものは未来永劫知覚できない。「読むこと」は、主体の色眼鏡に染められた言葉が作ったものだからである。それが〈向こう〉からの現象である。この②「原文の〈影〉」の「主観性を壊し続ける」ことで、読み手には未来永劫見えない〈原文〉に迫ろうとするのが「第三項論」のシステム、「読み」の原理」である。田中実はこの「読み」の原理」が作品中に〈仕組み・仕掛け〉られていることを、森鷗外、夏目漱石、太宰治、三島由起夫、宮沢賢治等の近代文学の作品の〈読み〉で実証し、これらの作品群を「近代文学の神髄」として、「自然主義小説」と峻別したのである。しかし、③ 実際の作品の解釈で論証しなければならぬところに、私たちの〈読み〉の難しさもあるのではなからうか。私は「第三項論」が実証論であることを須貝千里との対話から示唆を得たのであるが納得できた。田中実の「読み」は田中自身の広く深い〈読み〉の経験によって発見されたものである。つまり、「読み」の主観性を超える」ためには、その「主観性」を壊し続ける〈仕組み〉が作中に〈仕掛け〉られていることを論証する必要があるのだ。④ 主観を残して主観を克服し、超えるとはできない。この指摘は至極当然、私にとってまさに天からの声となった。

さらに、「第三項論に基づく授業の目標論の観点から見ると前置きして、田近洵一が本著で授業実践に求めた問題提起は次の二点である。「第三項論」の授業実践の立場に立つ中村龍一に応答を求めたと私は自分勝手に受け止めている。

①異質性の受容及び自己対象化の能力、さらには自己の言語に対するメタ言語的な意識・能力などを教育内容とした目標の設定が問題になる。

②文学の〈読み〉の教育のあり方が、実践の問題として問われているのである。

3 なぜ、須貝千里の〈困った質問〉に向き合う、ボトムアップの授業なのか

ところで、田近洵一が要求した授業実践への問題提起については、間接的ではあるがすでに須貝千里は次の論文で応答している。『第三項論が拓く文学研究／文学教育 高等学校』(田中実・須貝千里・難波博孝 2018 明治図書)である。

「授業構想」とは読者としての学習者の「読むこと」の活性化、了解不能の《他者》としての〈作品そのもの〉の〈影〉との格闘の過程のための、教師の側からの働きかけのことです。この働きかけにおいては、「教育の目的」としての、自己や他者、世界を問い続ける存在になることが学習者に求められています。その

ための「学習課題」には学習者が作品に対して抱くナゾと向き合おうとすることが求められています。学習者のナゾは往々にして、教師の側にとって〈困った質問〉として出現します。したがって、〈困った質問〉との向き合い方が「授業構想」であると言ふことになります。

須貝千里「〈困った質問〉に向き合って—文学作品の「教材研究」の課題と前提—」〈困った質問〉に向き合って—文学作品の「教材研究」の課題と前提—」（p.261）

① 須貝千里の「授業構想」論に私は共鳴している。「学習課題」には学習者が作品に対して抱くナゾと向き合おうとすることが求められており、「学習者のナゾは往々にして、教師の側にとって〈困った質問〉として出現」し、教師の想定をも超えてしまう。この② ボトムアップの授業観は「〈読み〉の理論」を実体化し網を掛けるトップダウンの授業観とは全く相容れないものである。つまり、「なぜこのような授業になったのか」を問われて、その〈読み方〉や〈世界観〉が相対化され検討されるべきである。この学習過程の手順こそ極めて大事だと私は考えている。例えば、教室の中で最も予想外の須貝千里さんの〈読み〉をみんなで「ああ読んだのか、こう読んだのかな、そこは私はこう読んだ、須貝さんは私の考えをどう思う？ 先生はどう思う？」と語り合う姿が想像できよう。③ トップダウンの授業観では、〈困った質問〉は教師の「限界」の外となり見捨てられる可能性があるのだ。「私（教師）が分かることはなんでも教えます。授業では私（教師）も分からないことを皆さんと一緒に考えたいのです」という教室風土をつくることに私は何よりも大切にしてきた。

田近洵一の問題提起には授業実践で具体的に応答していく外ないと私は考えている。知的理解では共有できているかに見えても、その断絶は絶望的に深いことが多いからだ。

④ 田近洵一は、田中実の「主観性を壊し続ける」4は小学生の教育内容としてふさわしくないと考え、これを排除した。そのため、「〈死〉なねばならぬ〈いのち〉」の価値の〈問い〉、例えば今日の小学校教材である宮沢賢治、あまみきみこ作品のプロットの意味を問うメタプロットの〈読み〉の深層世界はその視界から消えてしまった。ところが、子どもたちの深層では〈死〉は極めて近い存在であると臨床心理の河合隼雄や詩人森崎和江は述べている。5 私もそう実感している。日常生活言語を育むこれまでの国語教育の限界を田近は超えられなかったのである。次にその具体例を紹介する。

4 宮沢賢治 寓話『猫の事務所…ある小さな官衙に関する幻想…』

— 田近洵一「語りの放棄」を越えて —

『創造の〈読み〉新論—文学の〈読み〉の再生を求めて』（第一章 創造の〈読み〉の理論¹⁾）では、田近洵一の〈読み〉の「思考の枠組」の実践上の限界がさらに明らかになっている。「四『創造の〈読み〉の理論』」の章を引用する。

獅子は不審そうに、しばらく中を見ていましたが、いきなり戸口を叩いて入ってきました。猫どもの愕きようといったらありません。うろろろうろそこらにあるきまわるだけです。かま猫だけは泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。

獅子が大きなしっかりした声で言いました。

「そんなことでは地理も歴史もあったものではない。やめてしまえ。えい。解散を命じる。」

こうして事務所は廃止になりました。

ぼくは半分獅子に同感です。

絶対権力者（獅子）の突然の登場に（かま猫）をいじめてきた（猫たち）はうろたえる。自分たちのしてきたことを自覚していた。しかし、視点人物の（かま猫）だけは獅子が自分を助けに来てくれたと思いい「泣くのをやめて、まっすぐ立って（獅子）の裁定を待った。ここまでプロットを読み進めてきた「読み手」には（かま猫）の態度は当然、その通りであろう。しかし、事態はそうはならなかった。猫の地理と歴史を調べる役所『猫の事務所』の〈読み〉の肝となるのはプロットの「語り手」が最後に顔を出した「ぼくは獅子に半分同感です」をどう読むかの問題に収斂されていく。「語り手」がなぜこんなことを最後に語ったのか？の（メタプロット）をどう読むかである。

とりわけ「出来事」を語る「前の半分」と（金色の獅子の裁定）の（後の半分）で語られた相関をどう読むかの問題である。事務長（黒猫）と一番書記（白猫）、二番書記（虎猫）、三番書記（三毛猫）、そして毛が薄いがために差別の対象となってきた、この極めて優秀な（かま猫）たち。この役所の中の権力構造の相関関係は、常に気持ちの揺らぎがおこりそれぞれの内面は疑心暗鬼の無間地獄に浮いたり沈んだりしていたのである。この無間地獄こそ読者に問われている。この世を生きるものの生命持続の怯えであろう。

田近洵一は、この結末に絶対的権力者の獅子の事務所の廃止命令は「語り手としての責任の放棄としか言えなくなる」として「語りの放棄」を読んだ。①つまり、『猫の事務所』の田近の〈読み〉の限界点は、〈語り手〉の「語りの放棄」によって〈読み〉を（読み手）の恣意的意味づけに委ねてしまったことである。

しかし、獅子の事務所の廃止命令は、猫の事務所が無くなったという役所の組織上の問題だけではなく、「猫族の地理と歴史」の文化がこの世の記録から消滅することを意味するだろう。猫族の文化はこの世から消滅したということである。②これが〈語

り)によつて語られたこと、猫族の自己倒壊であると私は読む。ここから田近の「語り」の放棄」を抱え込んで、「文化以前」の深層に「問われる主体」が現象するのである。つまり、猫族の文化が消滅してしまった(文化以前の領域)から折り返した時、「読み手」に映し出されるのは、猫族のエリート役所である「第六事務所」が瓦解・倒壊してしまった世界である。事務長(黒猫)、一番書記(白猫)、二番書記(虎猫)、三番書記(三毛猫)、「かま猫」は、もはやエリートでもなく、黒でも白でも虎でも三毛でもない、猫でもない猫の「文化以前」の存在となつてしまった。

ところが、瓦解・倒壊してしまつた(文化以前)の背後からの光が照らし出したのは、生あるものたちが懸命にいのちをつなごうと蠢く様子が、それぞれに輝いていた。愛すべき輝くいのちであつた。もちろんあの全ての「猫たち？」もその生きものたちの中にいる。

この「文化以前」の領域に現象した寓話を『注文の多い料理店』の作者、宮沢賢治はどう考えていたのであろうか？

Ⅲ 深層の領域で「魂が響き合つて」世界が現象する

1 「そんなことがあるような気がするリアル」——深層批評へ

次に挙げるのは宮沢賢治『注文の多い料理店』「序文」である。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鐵道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。

ほんとうに、かしわばやし青い夕方をひとり通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、どうしてもこんな氣がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのどほり書いてたまでです。ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつぎりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんの「とだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのですきとほつたほんたうのたへものなることをどんなにねがふかわかりません。

宮沢賢治は「なんのことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです」、「どうしてもそんなことがあるような気がするのだ」と言っている。作者である賢治さえよく分からないのだ。「知的リアル」、「体感的リアル」を超えて現象する「そんなことがあるような気がするリアル」

ル」である。己の理屈でも、体感でもない、己の外部から突然降ってくる現象があると
いうことである。言い換えれば、読者が「己の理屈」、「感性」を超えて語られた矛盾
ある叙述に拉致されて、これを全て受け入れると深層世界から現象してくる（リアル）
がある。〈読み〉は、何よりもまず「言語の世界」も〈言語以前〉の何のことだか分か
らない世界も読み手はそのまま叙述に拉致され、連れ去られることから始まらなければ
ならないということだろう。

私は、「看護学の根本精神」で引用した「無限に相手を受け入れるようなことが自分の
生きる喜びと力になるような関係、委ね・委ねられる関係であり」、「教師は生徒の優
れた聴き手であることこそ肝要である。優れた読み手（教師）とは生徒それぞれの声が
いかに深く、鋭く受け止められるかにかかっている」、この田中実の言葉、〈委ね・委
ねられる関係〉を思い起こさずにいられない。

私も、ただただ宇宙の起源から突然降りそそがれる光りを待つことにしよう。〈文学
教材の力〉が多種多様な〈読み〉を吸収し、大空に跳ね返す可能性を内在させている
〈第三項〉の世界観認識を信じて待つこと、それが〈作品の意志〉との向き合い方なの
だろうと今は心底思えるようになった。

そして、「知的のリアル」と「体感的リアル」の向こうの底なしの間に、〈そんなこと
があるような気がするリアル〉の風の声を聴くのである。

人に我が身を委ね、委ねられる喜びは、人が心の奥深くから感じる生きる喜びで
あると思う。そのためには人は自分のなかに深い心の井戸、生の「静かな震え」

（村上春樹）のようなものを必要としている。それを仮に「魂」⁵（河合隼雄）
と呼んでおけば、この魂に響くもの、そこに向かって自分の心の井戸を掘り下げ
ていく方法こそ、文学にも国語教育にも看護にも必要とされているのではなかる
うか。『いのちと文学 読みのアナキーを超えて』序章 p65 p7（傍線 筆者）

深層で「この魂に響くもの、そこに向かって自分の心の井戸を掘り下げていく」こと
を私も授業実践で感得してみたい。宇宙の起源から降りそそがれる光りを待つて。

2 村上春樹『猫を棄てる — 父親について語るときに僕の語ること』をめぐる

村上春樹『猫を棄てる — 父親について語るときに僕の語ること』(2020.4 文藝春秋) を読み
「意識世界」と〈深層世界〉の相関関係をここではさらに考えてみたい。

田中実はこう述べている。

村上春樹の「パラレルワールド」はまた当人がよく使う「地下二階」とも深く
関わっています。村上はこれについて「いわゆる近代的自我というのは、下手を
するとうか、ほとんど地下一階でやっているんです、（中略）でも地下二階に

行ってしまうと、もう頭だけででは処理できないですよね。(村上春樹『海辺のカフカ』を中心に) (夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです) 村上春樹インタビュー集 1997-2009) これもまた現実社会には非現実・超現実のようなことがあるには収まりません。それは私という主体が「私」であって「私」ではない。「私」は反「私」であるという背理(パラドックス)の領域です。村上の「地下二階」はそれこそ前述の三島由紀夫が前掲『小説とは何か』で「現実と超現実の併存状態」のその外部の(向こう)を措定していることといみじくも同義です。「Ⅲ」地下二階、「私」Ⅱ反「私」、森林太郎・村上春樹 (1)パラレルワールドの出現……(語り)「語らない」と語っている」 (近代小説の《神髓》―「表層批評」から〈深層批評〉へ) (『都留文科大学研究紀要』第九五集 p.10)

「もう頭だけででは処理できない」深層世界の「地下二階」、「私」という主体が「私」であって「私」でない」とはどういうことであろうか。理屈を超えているから難しい。田中は村上春樹を引用してさらにこう述べている。

彼はさらに「壁と卵―エルサレム賞・受賞のあいさつ」で、「もし、ここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったら、私は常に卵の側に立ちます。……私が小説を書く理由は煎じ詰めればただ一つです。個人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに光を当てるためです。」とも言っています。それは人類の文明史の中でも根源的且つ逆説的でもあります。何故なら、ホモ・サピエンスがネアンデルタール人など、他の人類種とは異なり、唯一今日まで生き残っているのは、より大きな集団化・組織化を造り出し得たからであり、人類は様々なレベルのシステムに組み込まれて文明の進化を可能にしてきました。そこで、「言語と生命・認識と倫理」も問われてきました。このシステム、「壁」に対して村上が「卵」の側に立つことは前述の猫と人間の体温が分かちがたくなる意識を生きることに外なりません。ホモ・サピエンスの創り出した諸々のシステムを相対化し、その外部からシステムを捉えることを意味します。この注目に敬意を覚えざるを得ません。村上の文学は人類が勝ち得たシステムの保証のないところに「個人の尊厳」を見ます。そこに、良き小説の拠点を置きます。

(中略)

村上にとって「個人の尊厳」に「光を当てる」とは、人間の自我や、自己の枠内ではない、その外部、先の比喩でいえばどこまで人間で、どこまでが動物か、分からなくなってしまう「領域に「光を当てる」ことなのです。そこはもはや人間の意識の底に孕む正義や正当性の意識、その意味での倫理性にまつわる正しさは及びません。そこまで行かないと戦争に向かうイデオロギーには立ち向かえないのです。

それは、「私」が「私」でありながら猫であること、猫が猫でありながら「私」

である立場です。これが、「私」は反「私」であって、初めて「私」であるという背理に立つことを可能にします。(2 村上春樹の小説観……「無機的な世界」から「個人の魂の尊厳」に光を当て)

(田中実「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語」〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を捨てる 父親について語るとき』と『一人称単数』あまんきみこの童話』あるひあるとき』(都留文科大学大学院紀要 第二五集 2021.3) (傍線 太字筆者)

① 「ホモ・サピエンスがネアンデルタール人など他の人類種とは異なり、唯一今日まで生き残っているのは、より大きな集団化・組織化を造り出し得たからであり人類は様々なレベルのシステムに組み込まれて文明の進化を可能にしてみました。」と、村上春樹はホモ・サピエンスの制度のシステムを単純に否定することはしない。二項対立は超えているのである。

しかし、硬い「壁」というシステムと対峙せざるを得ない事態に対しては、村上は無条件に「卵」の側に立つという。それは「システムの保証のないところに「個人の魂の尊厳」に「光を当てる」ことになるからだ。」と、田中は村上のこの断言を全身全霊で受け止め、「卵」の側に立つことは②「猫と人間の体温が分かちがたくなる意識を生きること以外ならない」と述べて、村上の「良き小説」の側に田中実も立つのである。

確かに「厚い壁」に守られている人間は、生き延びられる側に自分はいらぬという意識を持つ。そこでは主体の問題は浮上しないか、自分の思想・信念に蓋をして生き延びる私はこれを単なる保身として断罪することはできない。しかし「猫」の立場、「卵」の側は生死を賭して「己の魂の尊厳」と向き合わざるを得ないだろう。戦うにしても逃げにしても。ならば、「村上の文学が人類が勝ち得たシステムの保証のないところに「個人の魂の尊厳」を見る」ことになるのは必然であろう。それは、「主体も客体も溶けてしまった世界」から「個人の魂の尊厳」と向き合い、照らし返すことである。③

この二項対立を超えて、皆が仲良くなるためには、己を捨てた〈第三項〉が必須なのだ。戦後民主主義の申し子として一九四六年に生まれ、七十年代に内面の自己倒壊を経験し、ある意味生き残ってしまった私には村上春樹の心境に深い共感がある。

ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとパレスチナの戦争等々、ここでは無数の死者が、「集合的な何かに置き換えられる」、例えば、死者〇〇〇〇〇〇人 内、子ども〇〇〇〇〇人と。職業作家村上春樹は偶然の繋がりから生まれたこの一人の子どもの「いのちの物語」を引き受け、「書くこと」で、その「責務」を果たそうとしているのである。

【注】

1 田中実 〈作品の意志〉 「小説の読みにはそれ自体ある動き、ある方向に向かったの動きがある。」

作品には読み手の恣意を超えた〈意志〉が働き、その〈意志〉に従って動き出すと言ってもよい。……」(「〈作品の意志〉がありそれは〈本文〉の外にある「独歩の詩魂」に重なる。」「まさ」)「作品のいのち」である。

(田中実『いのちと文学 読みのアナーキーを超えて』(1997右文書院) (「〈語り手〉を超えて語られるもの—『春の鳥』国木田独歩』P158)

2 『文学研究×国語教育』の会」(「略称 架ける会」新しい「文学作品・文学教材」の〈読み〉の実践研究の場として、『文学研究×国語教育』の会』を2021・8に設立し、以降、月例会や夏期研究集会を行っている。

3 田近洵「『国語教育革新の視点—「学び」を通して、人間として生きる—』(2022 東洋館出版社) / 『生活主義国語教育の再生と創造』(2022 三省堂)が上梓された。

4 「主観性を壊し続ける」「倒壊・瓦解は、文学作品によって主体が撃たれ、既存の自己の価値観・世界観が壊れ、新たな自己が立ち上がる可能性にひらかれることを語句の意味に込めている。」「『文学の力×教材の力 理論編』(「キーワードのための試み」P64 田中実・須貝千里編 教育出版社2001.6)

5 河合隼雄著『子どもの宇宙』Ⅳ子どもと死(1980 岩波新書)

1 子どもは死を考える 「真剣な問い 三、四歳の子どもが死について考えることを、森崎和江が述べている。…森崎は自分の二人のそれぞれ、三、四歳ごろに、「なぜ死ぬの」「死んだらどうなるの」「ママは死ぬ」と、「わくわくない?」と問いかけてきたと述べている。

6 「魂」 河合隼雄著『子どもの宇宙』Ⅳ子どもと死(1980 岩波新書)

7 子どもは死を考える 「魂の深い交流 森崎は正直に自分の考えを語りながら「ことばを聞く」としてゐるわけではない裸の魂が、感じられて、子を抱きつつその「大きさ重さ」が本当に感じられるのだ。子どもは常に小さいとは限らない。森崎は、まっとうに答えられぬ自分を責め「ただひたすら、一緒に生きるからゆるしてね」と心から想っていると、そのうち、子が私の背へちいさな手をのび、撫でつつ言った。「泣かないでね、もう「わい」と言わないから」…

